

仙台教区 復興支援活動ニュースレター

4→6・45通信

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
 〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
 カトリック仙台司教区事務局
 TEL 022-222-7371 FAX 022-222-7378
 義援金振替口座：02260-9-2305
 名義：カトリック仙台司教区本部事務局

震災から丸3年を迎えた3月11日、被災地の宮古教会で、仙台教区の平賀司教が被災者と共にミサをささげ、盛岡市からも信徒が参加しました。また、福島第一原発の最後の爆発が起きた3月15日には、原町教会で「いのちの光 3.15 フクシマ」の集会が開催されました。また、巨理では、さいたま教区の方々が地道な活動を続けてくださっています。以上3教会の方々の活動をご紹介します。

3月11日 大震災犠牲者追悼・復興祈願ミサへ

カトリック四ツ家教会

中村 美栄子

あれから3年、何かをしなければと思い巡らしていたところに、宮古教会へ平賀司教様が来られ、ミサを上げられるというお知らせが目に入りました。ぜひ行ってミサにあずかりたい、被災者に心を寄せたいと思っていました。

月1度の盛岡市内3教会（志家・上堂・四ツ家）の合同会議の場で、これこそ4号線（県央）から45号線（沿岸）への支援ではないかということになり、3教会合同で宮古教会へバスで出かけることになりました。参加締め切りが過ぎても、バスの許容人数を越えても申し込みが続きました。みなさん、被災地へ行きたい、何かをしたいと思ってもなかなか行動に移せない、体がついて行かない、と思っただけが先行する状態で悶々としていたようです。



当日は、3年前のあの日のように厳しい寒さの中でも、みなさん熱気に溢れたお顔で、予定時間よりも早く集まり、60人で出発しました。

途中休憩をはさんで2時間半。やはり沿岸は遠い！！宮古市内はだいぶきれいに片づけられ、初めて見る方にはあまり震災の悲惨さが感じられないようにも見受けられました。津波で流された埠頭に新装なった道の駅の食堂で、まずは昼食。ミサの時間を気にしながら早々と教会へ。

午後2時からミサが始まりました。司教様と4人の司祭、3人の神学生の侍者。宮古教会が祭壇上も聖堂もこんなにいっぱいになったことがあったらと思うました。ちょうど震災が起こった時間には、教会の鐘の音、港のサイレンなど一斉に鳴り渡り、全被災者とともに心を一にして祈りました。

平賀司教様のお話は、深く心にしみ、感銘を受けました。第二バチカン公会議からの流れを話され、弱い人、悲しむ人、苦しむ人のそばへと。教会の中に閉じこもらないで、教会をオープンにして周囲の社会に出ていくように、聖霊が背中を押ししていますと言われました。

毎月、釜石や宮古の仮設住宅を訪問して被災された方々と話をしたり、一緒に食事を摂ったりしていても、これでいいのだろうか、これが支援になっているのだろうか、と、自問自答することがあります。でも、司教様のお話で勇気を頂きました。神様が、今、行きなさいと背中を押してくださっている、その体力と時間を与えて下さっているんだと思えば、何の恐れもなくなります。色々思い出して悩んだり、落ち込んだり、悲しんだりする方々の苦悩が、少しでも軽減されることを願いながら、また走り続けたいと思います。『これからも、まだ来てくれるんですよね』といううれしい言葉が続く限り、寄り添っていきたいと思っています。



「いちごの絆の会」 2014年活動スタート

カトリック烏山教会
カトリック那須教会

藤田 恵神父
アントワン神父

※栃木県の亙理ボランティア「いちごの絆の会」は、2012年3月から栃木県の教会を中心に、月1回1泊での活動を継続的に行っております。活動の内容としては、手芸や小物作り、合唱、健康体操、映画上映会などです。冬季（12月～2月）の間は、降雪による高速道路の通行止め等の問題から活動を休止していましたが、活動を再開して2014年の活動がスタートしたという活動報告が届きましたので、ご紹介させていただきます。

2014年3月24日、25日に宮城県亙理郡亙理町の3カ所の仮設住宅で、2014年最初の活動を行いました。ボランティア参加者は、那須教会信徒2名、ベタニア会シスター2名、アントワン神父の5名でした。

いつものように初日の活動後は白石教会に宿泊させていただき、翌日は車で40分走り、亙理教会まで行ってミサを捧げました。ミサには、亙理教会信徒である高田さんと、信徒会長代理の2名の方が参加してくださいました。高田さんは、2年前にボランティアを開始する際にお家を貸して下さった方で、25日の活動にも一緒に参加してくださいました。

那須教会としての映画上映会は、今回で第6回目となり、『男はつらいよ 望郷篇』（シリーズ第5作）を行いました。活動に



際して、マ・メゾン光星から映写機器、ワゴン車をお借りし、トラピスト修道院からガレットを提供していただきました。いつもご協力をいただき、ありがとうございます。

映画上映会へは、総勢66名の方にご参加いただきました。内訳としては、24日午後「中央工業団地」27人（うち男性1人）、25日午前「公共ゾーン第1仮設住宅」19人（うち男性7人）、25日午後「旧館仮設住宅」20人（うち男性5人）の参加でした。

男性の参加者は、全体の2割でしたが、昨年の参加人数と比較すると微増傾向にあります。また、今回は学校が春休みに入っていたこともあり、旧館仮設住宅では、5人の小学生の女児が参加してくれました。これまでの映画会で子供の参加は初めてだったので、嬉しい思いでした。上映中は、これまで同様に笑いが多く見られ、喜んでいただけたようでした。

参加者の中には、映画会のためにボランティアが到着する前から楽しみに待っていてくださる人や、すでに仮設を出られて違う場所での生活を始められている方もいました。仮設住宅を出られても、新たな生活の先ではボランティア活動がなく、仮設での交友関係が依然として生き続けているのだということを感じました。



また、仮設に入居して3年近くが経つが、未だに被災地を訪れる機会がなく、復興の様子をまだ見ていないという住民の方がいたことには、驚きを感じました。一方で、津波による地震の被災体験を記録されている男性がおり、震災体験を他の人に伝えていきたいと話されていました。そして、仮設住宅の方々とのお話の中で、復興が少しずつ進んでいる半面、仮設を出た後の方が大変ですと言われていたのが、とても心に残っています。

今後の活動については、4月21日（月）に、宇都宮のオカリナグループと烏山の日本舞踊のグループがジョイントし、日帰りで2ヶ所の仮設住宅を訪問して演奏と踊りを披露することと、5月26日（月）～27日（火）に、大田原教会のメンバーで、絵手紙教室を3ヶ所の仮設で開催することが予定されています。

これからも「いちごの絆の会」として継続的に支援活動を行っていきたいと思います。

「いのちの光3. 15フクシマ」が意味したもの

カトリック原町教会 勝冶 美喜子

山形へ避難していたときの知人が、「春をお届けします！」とあって、大好きな落のとうを送ってくれました。その気持ちをありがたく受けて、落のとう味噌や佃煮を作りました。

しかし、気持ちはずんと重くなってしまいます。春一番の大地からの贈り物は、この地でも三年前までは、ごく当たり前に摘んでその恵みを楽しむことが出来ていたのです。そう、東京電力福島第一原発の爆発事故が起きるまでは。

このような気持ちをあと何回続けたら元の生活を取り戻すことが出来るのだろうか？あるいは、もう取り戻せないのか？そのことを考えただけでも、深い泥の中でもがいている自分が見えてきます。

3年という月日は、時間の一区切りのような気がします。この地で、これからの生活をどうしようと悩み、苦しみ、迷い、もがいてきた私たち。その間、数え切れないほどたくさんの方々助けられ、励まされてきました。そのお陰でここまで来れたのだと思うと、



「ありがとうございます」の言葉以外見つかりません。ただその一方で、多くの皆様のご支援は、それぞれの生活にさらに付け加えられて成り立ってきたものであることも承知しておりました。

原町教会は、原発に最も近いところにある教会でした。ここに住むものとして一体何ができるのか、何をしていくべきなのか、皆で考えました。そして、津波の被害だけではなく原発事故による放射能に汚染されたこの地について、ここを訪れてくださった方々に率直にお伝えしたり、抱えている不安などを話したりすることではないかと思ひ至りました。それは私たちにしかできないことでもあったのです。

そんな思いがふつふつと湧き、有志が集まり、慣れない集いの準備に右往左往しながら迎えたのが、3月15日でした。三年目にしてやっと開くことが出来た集いです。この日は福島第一原発が三度目に爆発した日です。忘れてはならない日になってしまいました。



原発立地地域でもないのに、ひとたび事故が起こるとこのように広範囲にわたり、放射能で汚染され、人々を苦しめてしまうものだという事。そしてそのような原発がこの日本の周囲に50基以上もあるということ。燃やし終えた燃料棒は、どうになってしまうのか等々考え始めると、いろいろな思いが膨らんでいきます。

「いのちの光 3.15 フクシマ」は、そんな思いから生まれた意義深い集いとなりました。これから先、私たちが不安を抱くことなく生活ができるようになるまで、続けていきたいと思っています。

「いのちの光 3.15 フクシマ」

福島県南相馬市の原町教会で、2014年3月15日、原発事故後のフクシマについて考え、祈る「いのちの光3.15フクシマ」が開かれました。この集いは、福島第一原発の最後の爆発が起きた3月15日を「福島の運命を変えた日」として、原町教会の信徒有志の実行委員会が主催したものです。第一部「現地の光」、第二部「みことばの光」、第三部「神の民の光」が行われ、全国各地からおよそ100名の方が参加されました。

第一部「現地の光」では、一般社団法人えこえね南相馬研究機構理事の奥村健郎さんが、地元での農業や除染の支援など、復興に向けた試みを紹介しました。

第二部「みことばの光」では、歴史学者の太田道子さんが、「人間の書」としての聖書の魅力を語りました。また、幾多の危機を経てきた人間の歴史を基にした聖書によって“イエスと出会う”ことについてもお話されました。

第三部「神の民の光」は、平賀司教様による派遣ミサでした。平賀司教様は説教で、豊かで便利な生活を追求した結果、爆発事故によりもっとも大切にしなければならない人間のいのちが危機に追いやられてしまったことへの反省を促し、人間を大切にする「いのちのための選択」を積み重ねていくべきだとしました。

